

視点の多様性から見る金子みすゞの表現

金井明子

はじめに

本論文は、筆者の「みすゞに向き合う——心に迫る見えないしかけ——」(2003年度実践女子大学卒業論文)に続く考察である。ここでは、矢崎節夫が述べたことば^①をきっかけとし、次のような一つの疑問をもとにみすゞの詩に隠されているしかけをさぐった。

(前略) みすゞの詩は「やさしく」て「あたたか」と述べているが、それは果たして「小さいもの」「力の弱いもの」「無名なもの」「無用なもの」などに焦点を当て、題材にしたことよって感じるという単純なものだろうか。^②

いくつかの詩を表現方法ごとに分類した結果、様々な特徴が見つかった。例えば、「子どもの目線を利用するもの」や意外性をもたらず「視点の変化」、そして事柄の描写によって感情を表現する「心情を暗示するもの」などである。

結果として、題材そのものが読者になんらかの影響を与えているの

ではなく、あくまで題材は、みすゞが詩に込めた感情や思いを伝えるための手段にすぎないという結論を得た。

本稿では前稿を踏まえ、「視点の変化」に着目し、視点の動き方・置き方に重点を置き、いま一度新たな角度から見たいと思う。この「視点の変化」というものは、どの詩にも特徴的にみられ、詩に込められたみすゞの思いを読み解く上では欠かせない特徴の一つであると考えられる。

一 二つの世界に注ぐまなざし

みすゞの詩には、二つの世界が同時に織り込まれている場合が多い。その最もわかりやすい例として、代表作ともいわれている「大漁」があげられる。

大漁

朝焼小焼だ

大漁だ

大羽鱈の

大漁だ。

浜は祭りの

やうだけど

海のなかでは

何万の

鱈のとむらひ

するだらう。

(I-101)

まずこの詩を読むと、「誰か」が、大羽鱈の漁によって祭りのように賑っている浜の様子を「どこか」で見ている、と同時に、海の中にいるだろうと思われる鱈たちの様子を想像している姿が思い浮かぶだろう。

この「誰か」が見ている〈浜〉の様子と、何万もの鱈がいるだろうと想像する〈海〉の中の様子が二つの世界である。また〈浜〉における主役は人間であり、〈海〉では鱈が主役であることから、「人」と「動物」という観点からも二つの世界にわけることができる。

では、この二つの世界を見て想像している「誰か」とは、一体誰なのであろう。

詩の中には「私」ということはもちろん、固有名詞なども一切書かれていない。ということは、この詩を謡っている人、つまり語り手が「誰か」ということになる。したがって実際には、語り手≠みすゞ

となるが、特定はされていないので、この詩を見て読んでいる時間はその読者自身が語り手となる。そして、語り手が見えないからこそ誰でもその語り手になることもできるのだ。

次に、この語り手は「どこ」でこの詩を謡っているのか。

真相はわからないが、〈浜〉と〈海〉が見渡せる場所となると、やはり浜辺になるだろうか。それとも、みすゞが育った山口県仙崎^③は漁師の町であり海も近いことから、家の窓から浜辺の様子が望めたのかもしれない。どちらにしろ、〈浜〉と〈海〉に視線を注ぐことができる第三の場所に語り手がいることがわかる。

以上のことから、「語り手(みすゞ)」が「浜辺」のような場所で、〈浜〉と〈海〉の様子を見ながら、もしくは過去のその情景を思い出しながら、この詩を謡っていると考えられる。言い換えると、第三の場所にいる語り手を視座として、その語り手が〈浜〉と〈海〉の二つの世界に視点を置いているということになる。

注目すべきことは、語り手が第三の場所にいるということである。語り手である自分自身は、賑いをみせる〈浜〉にも、静寂を感じさせる〈海〉にも敢えて属さずに、第三の場所を視座として二つの世界に視点を置く。これがみすゞのまなざしなのである。

前にも述べたが、二つの世界は「人」と「動物」の異なる世界であるともいえる。そうなると、どうしても人間である自分自身は「人」の世界を中心に考え、一方向に偏りがちになる。しかし、みすゞはどこの世界にも属することなく、人の世界からも、海の中の世界からも一歩ひいて客観的に二つの世界を見ていたのだ。ただし、二つの世界

を比較することで何らかの価値を見出そうなどということも決してしていない。みずゞ独自の視点を通して、たとえ表面からは見えにくいものであっても様々な世界が存在しているということ、そして、一つの出来事や物事にもたくさんさんの世界が関わりあっているということをお教えてくれているのではないだろうか。

二 「私」自身を見つめるということ

一節では様々な世界へと目を向けているみずゞの視点を取り上げてきたが、この二節ではその視点が自分自身へ向けられ、問いかけとなっている詩を見ていきたい。

「大漁」と同じように代表作とも言われ、最近では学校の教科書にも取り上げられ、教材としても使用されている「私と小鳥と鈴と」である。

私と小鳥と鈴と

私が両手をひろげても、
お空はちつとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のやうに、
地面を速くは走れない。

私がかからだをゆすっても、

きれいな音は出ないけど、

あの鳴る鈴は私のやうに

たくさんな唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、

みんなちがつて、みんないい。

(Ⅲ—145)

この詩では、「私」と「小鳥」と「鈴」がどれも同じように対比されているかのように感じるが主役がいるのだ。それは「私」である。

一連目も二連目も「私」から始まり、「私」と「小鳥」「鈴」を比べている。「私」対「小鳥」と「鈴」の比較である。そして、決定的なものが第三連の「それから私」の「それから」という強調である。

主役である「私」自身を見つめ直そうとしているのが「私」の目的なのではないか。「私」自身を見つめ直し、その価値を認めようと思つたことから、第三連の「みんなちがつて、みんないい」という肯定する表現を用いているわけであるが、その前までの一連・二連では、「私」に対する肯定的な表現は一つもなく、逆に否定されているのに気付く。

しかし、なぜこの詩全体から「私」を肯定するという意思が感じられるのだろうか。最終連の一言だけの強さだけだとは思えない。

それは、「小鳥」と「鈴」を否定しているからである。つまり、「私」以外の相手である「小鳥」と「鈴」のできないことをあげることによって、逆に「私」のできることが見えてくるのである。同じように「私」のできないことをあげることによって、「小鳥」と「鈴」も肯定される

ているのである。

「みんなちがつて、みんないい」という一文からは、捉え方によって色々な解釈ができるが、みずぶはただ単純に「みんないい」と認めているわけではない。もしも「みんないい」ということを肯定だけしたのであれば、一連や二連でわざわざ否定する必要はなく、初めから全て肯定すればいいのである。それぞれにできることを、たくさん並べたらそれで済むことなのだ。

この詩は、できることやできないことを教えてくれているものではない。「私」以外の他者を見つめることによって、「私」自身も見つめることになる、と同時に「私」自身も見えてくる、ということを示しているのではないだろうか。

この「私と小鳥と鈴と」では「私」と「他者」の価値がしっかり打ち出されている。その価値自体がどうこう言っているのではなく、「他者」との関わりの中で「私」自身が「私」自身を見つめることができた、ということに大きな意味を持たせているのである。

常に「私」自身の存在を「他者」との間で見つめ、同時に「私」自身を見つめることによって「他者」をも見つめ、見つけてきたという、みずぶの強いまなざしが詩の中には表れているのである。

次の「蜂と神さま」は、視点がおもしろいほどに移り変わり、驚きを与える、とても臨場感のある詩である。「私と小鳥と鈴と」と比較すると形式も異なり、だいぶ違った印象を与えるだろう。しかし、みずぶが向けていたまなざしは共通している。

蜂と神さま

蜂はお花のなかに、
お花はお庭のなかに、
お庭は土塀のなかに、
土塀は町のなかに、
町は日本のなかに、
日本は世界のなかに、
世界は神さまのなかに。

さうして、さうして、神さまは、

小ちやな蜂のなかに。 (II-19)

まず一連目では、本当に小さい「蜂」から始まり、どんどん視点となる対象範囲が広げられていき、最後には「神さま」という存在にたどりついている。そして、このまま視点となる対象範囲が広がったところで終わりになるかと思いきや、二連目で一転するのである。この視点の動きが読者に驚きをもたらすようである。視点の変化が驚きとなり、新たな視点の向け方を知ることによって新鮮な気分を感じさせてくれるのかもしれない。

しかし、単純におもしろさや驚きを求めたり、新たな視点を発見させるためだけの詩とも思えないのである。

この詩に登場する「蜂」から「神さま」まで全て「なかに」という

ことばでつながれている。「なかに」のつづきのことばが書かれていないので、「なかに」どうなっているのかは明らかではない。しかし、明らかにされていないことによって、また読者の想像力をも掻き立てているのかもしれない。では、「なかに」の後につながることは何になるか。

最もシンプルかつ全てにあてはまるのが「ある」である。動物や昆虫（ここでは蜂）の場合は「いる」になるだろうか。すると、「○○は□□のなかに、ある（いる）」ということになる。そして、さらにこの「ある（いる）」をもう少し具体的に言い表すと「存在する」ということになる。

蜂は蜜を吸うためにお花のなかにもぐっているだろう。そのお花はお庭のなかに並んで植えられているだろう。そしてそのお庭は、土塀に囲まれているだろう。そしてさらにその土塀は、町のなかに列をつくって立っているだろう。さらにその町は、日本という列島のなかにいくつも点在しているだろう。さらにその日本は、世界のなかの一つの国として成り立っているだろう。そしてさらにその世界は、神さまのなかに存在しているという。

ここで、この「神さま」というものは「世界」よりも大きい存在であることがわかるが、実際に「世界」よりも大きいものなのか、果たして目に見えるものなのかはわからない。しかし、一連目の「蜂」から「世界」までの流れで見えていくと、自然と「世界」よりも大きいものになる。つまり「○○は□□のなかに、」の○○は、□□より「小さいもの」となり□□は「大きいもの」となるのである。

しかし、ここまでに見てきた「小さいもの」は「大きいもの」の中に、という固定された視点は、第二連で一気に覆されるのである。「世界」よりも大きなものが「蜂」の中にいるというのである。それも「小ちやな」「蜂」である。この「小ちやな」ということは「蜂」の小ささを強調するとともに、同時に「神さま」がとてつもなく大きいということを示している。これが、視点の変化とともに織り込まれたみずぐのまなざしである。一連目で「神さま」が「世界」よりも大きなものであると印象づけることで、二連目の「小ちやな」「蜂」がより生きてくるのである。そして、この転回がみずぐの伝えたい思いとして表現されていると考えられる。

一連目では、「小さいもの」は「大きいもの」の中にあるという、いわゆる一般的なことが描かれている。しかし、それが二連目で一気に覆されるということは、結局は大きさは関係ないということである。「世界」よりも大きいとされる「神さま」は、どんなに小さなものにも存在しているのである。日常生活の中で見過ごしがちなものでも、目につきにくいほどの小さなものでもそれは大きな存在であり、忘れてはならないと訴えているのではないか。

それから、この詩の中には人間が出てこない。しかし、自分以外のまわりのものが世界から見渡せることによって、嫌でも自分の大きさが見えてくる。人間、つまり、自分自身の位置や大きさを見直そうとする意思も読み取れるわけである。このまわりを見つめることによって自分をも見つめ、また自分自身を見つめることによってまわりも見えてくるという点が「私と小鳥と鈴と」に共通している。

三 心情を想像させる視点

「うれしい」や「悲しい」「さびしい」など、感情を表すことば自体は詩の中には書かれていない。しかし、その詩に描かれている登場人物の「悲しみ」や「喜び」がなぜ伝わってくる。そう感じさせるしかけとは一体どのようなものであるのか。

雀のかあさん

子供が

子雀

つかまへた。

その子の

かあさん

笑つてた。

雀の

かあさん

それみてた。

お屋根で

鳴かずに

それ見てた。

(I-27)

この詩では、「その子のかあさん」と「雀のかあさん」が対比されて描かれている。そして、語り手自身が視座となり、対比された二つの「かあさん」を見ているのである。この視点の置き方は、一節で取り上げた「大漁」と共通している。視座となる語り手は、視点対象となる二つの立場をどちらにも属することなく第三の場所から見ているのである。

まず最初に視点対象となっている「その子のかあさん」は、子雀を捕まえた元気なわが子の姿を見て、喜んで「笑つて」いるのがわかる。この時点では、どこにでもありそうな微笑ましい親子の光景である。それに対して「雀のかあさん」は、わが子が奪われるのを「鳴かずに」ただ見ているのである。ここでの「鳴かずに」という描写が、「悲しい」ということば以上に「雀のかあさん」の切なさをより一層強調している。そして、「笑つて」わが子を見守る「かあさん」がいると同時に、「鳴かずに」わが子を見守る「かあさん」もいることをみずぐは教えてくれているのである。

それから、三連と四連の「それみてた。」「それ見てた。」の繰り返しによって、視座となる語り手の心情も伝わってくるのである。「雀のかあさん」の様子を見て、「かわいそう」だとか「切ない」などということばは使わずに、ただその様子を外側から見ている。そして、繰り返しすることによって、語り手の視点対象になっていることがさらに強調されているのである。その語り手の目線が読者にも伝わり、読者

の心も動かされるといふことである。

「雀のかあさん」と同じような特徴をもつものが、次の詩である。

仲なほり

げんげのあせみち、春がすみ、
むかうにあの子が立つてゐた。

あの子はげんげを持つてゐた、
私も、げんげを摘んでゐた。

あの子が笑ふ、と、気がつけば、
私も知らずに笑つてた。

げんげのあせみち、春がすみ、
ピイチク雲雀が啼いてゐた。

(II—226)

この詩の題名は「仲なほり」となっているが、詩の中には「仲なほり」ができたかどうかの結果はどこにも書かれてはいない。「あの子」と「私」という二人の登場人物は確認できるが、書かれているのは二人の行動の描写と風景や「雲雀」の様子だけである。

詩の中の視座は「私」にあり、最後まで「私」が語っている。「あの子」の様子も全て「私」の目線を通して語られている。という

ことは、「私」の心情の変化によって「仲なほり」を表現していると考えられる。すると、三連目の「私も知らずに笑つてた。」ということが、「私」の心情の変化であり、「仲なほり」の証にもなっているのである。

それからもう一つ、「私」と「あの子」が一緒に笑うことで「仲なほり」するということの前にも、「仲なほり」までの距離は少しずつ縮まっているのがわかる。それが一連目と二連目である。まず「むかうにあの子が立つてゐた。」ということから、「私」は「あの子」を見ることによって「あの子」の存在を確認したことがわかる。「むかう」ということで「あの子」は「私」からみると、まだまだ遠くにいるようである。そして二連目では、「あの子」は「げんげ」を持つていて、同じように「私」も「げんげ」を摘んでいたことで「私」と「あの子」の共通点を見つけることになる。しかし、一連目と変わらず実際の「あの子」との距離は縮まっていない。ただし、同じげんげを持つていたことによって二人の心理的な距離は縮まったようにみえる。そして次に一緒に笑うことで、またその距離はぐっと縮まっているのである。

このように、この詩では「私」と「あの子」の距離の描写によって、二人の「仲なほり」するまでの心情がかわいらしく描かれているのである。そして、心情を表現する一言のことばで片付けてしまうのではなく、視座となっている「私」の目線を通して語ることによって、微妙で繊細な心情をも表現できるのだろう。

おわりに

本稿で取り上げたみすゞの詩の特徴はほんの一部に過ぎないが、これまでに見てきた三つの特徴の中でも様々な視点があり、みすゞの視線の先にはたくさんの世界があることに気づくべきである。

みすゞの詩は、「視点の変化」によって驚きとともに新しい発見をもたらすようである。それと同時に、語り手を特定させないことにより、読者自身を語り手にするのである。その結果として、みすゞ独自の視点を誰もが体験し、様々な世界へ視点を向けることが可能になるのではないかと考える。

このように、みすゞの詩については未解明の部分も多い。今後もしるような角度からさらに考察を深めていきたいと思う。

注

(1) 「(前略)みすゞの心のいのりが、だれの心にも、やさしく、あたたかくひびいてくるでしょう。」

みすゞの童謡は、小さいもの、力の弱いもの、無名なもの、無用なもの、この地球という星に存在する、すべてのものに対する、いのりのうただったのです。〔『金子みすゞ童謡集・わたしと小鳥とすずと』

JULA出版局、昭五十九・八）

「大漁に酔った浜の人々の祭りのような騒ぎをよそに、静かに小さきものたち、力の弱いものたちの悲しみをみつめた、一人のやさしい女性の目を感じた(中略)〔『金子みすゞノート』『金子みすゞ全集』所収)」

(2) 金井明子「みすゞに向き合う——心に迫る見えないしかけ——」(二〇〇三年度実践女子大学卒業論文)より引用。

(3) 金子みすゞ(本名・金子テル)は、明治三十六年(一九〇三)、父金子庄之助、母ミチの長女として、山口県大津郡仙崎(現在の長門市仙崎)に生まれる。そして、二十歳までこの仙崎で暮らした後、下関に移住している。

参考文献

- ・金子みすゞ著『金子みすゞ童謡集・わたしと小鳥とすずと』(JULA出版局、一九八四・八)
- ・酒井大岳著『金子みすゞの詩を生きる』(JULA出版局、一九九四・八)
- ・島田陽子著『金子みすゞへの旅』(編集工房ノア、一九九五・六)
- ・野浪正隆「金子みすゞ詩作品の表現特性」『学大國文』大阪教育大学、一九九八・二)
- ・西口徹編『文藝別冊 総特集 金子みすゞ』(河出書房新社、二〇〇〇・一)
- ・詩と詩論研究会編『金子みすゞ 詩と真実』(勉誠出版、二〇〇二・七)
- ・上山大峻・外松太恵子著『金子みすゞ いのちのうた・1』(JULA出版局、二〇〇二・十二)
- ・詩と詩論研究会編『金子みすゞ 花と海と空の詩』(勉誠出版、二〇〇三・二)
- ・藤本恵「金子みすゞの批評性——〈お伽噺〉をめぐって——」(『昭和文学研究 第46集』二〇〇三・三)
- ・湯原公浩編『別冊太陽 日本のこころ一二二号 生誕一〇〇年記念 金子みすゞ』(平凡社、二〇〇三・四)
- ・金井明子「みすゞに向き合う——心に迫る見えないしかけ——」(二〇〇三年度実践女子大学卒業論文)

附記

本稿では原文の引用に際して、左記のような処理をした。

- 一、金子みすゞの詩の引用は、『新装版 金子みすゞ全集』(「I・美しい町」
「II・空のかあさま」「III・さみしい王女」JULIA出版局、一九八四・
八)に拠る。
- 二、ただし、かなづかいは旧かなづかひのまま、漢字は新漢字に改めた。
- 三、また、ルビは省略した。
- 四、引用する詩の左下には、全集巻号とページ数を併記しておく。

* 例えば、「大漁」の左下に “(I-101)” と書かれていれば、『新装版 金子みすゞ全集「I・美しい町」』の101ページに掲載されている詩ということになる。